

主 題：主イエスの黙示3

聖書箇所：黙示録 1章7-8節

主イエス・キリストによって、私たちクリスチャンはどんなにすばらしい祝福をいただいたのか、そのことを見て来ました。主は永遠の愛をもってあなたを愛し続けてくださっている、完全な罪の赦しを与えてくださった、一方的な恵みによって主は祝福の中にあなたを招いてくださった。あなたをこの神のご支配のもとに置いてくださっているし、また、あなたを神の祭司としてくださった。それゆえに、あなたは常に神の前に立つことが赦されていると、そのことを前回見たのですが、今日はこの7節と8節から、神が私たちに与えてくださっている約束の一つ、祝福の一つですが、主の「再臨」についてごいっしょに見ていきます。私たちはこのような希望を神から与えられているのです。

C. 教会への励ましのメッセージ 4-8節

4. 主の再臨 7, 8節

7節「見よ、彼が、雲に乗って来られる。すべての目、ことに彼を突き刺した者たちが、彼を見る。地上の諸族はみな、彼のゆえに嘆く。しかり。アーメン。」

*「見よ。主が雲に乗って来られる」

これは主イエスの再臨のことです。ヨハネはここに「主イエス・キリストの再臨」のことを記しているのです。そして、皆さんは「再臨」ということばを聞くと、再臨には二つあるということをご存じでしょう。主イエス・キリストがこの地上に帰って来られる「地上再臨」と、主イエス・キリストを信じる者たちと空中で会う「空中再臨」と、この二つの再臨です。聖書を見ると、どちらの再臨にも「雲」が出て来ます。7節で見たように「雲に乗って来られる」と。

*「雲」とは？：神の臨在を象徴しています。旧約聖書を思い出していただくと、

・イスラエルの民がエジプトを出て荒野を旅していたときに：雲が彼らとともにいました。出エジプト13：21-22「：21【主】は、昼は、途上の彼らを導くため、雲の柱の中に、夜は、彼らを照らすため、火の柱の中にいて、彼らの前を進まれた。彼らが昼も夜も進んで行くためであった。：22 昼はこの雲の柱、夜はこの火の柱が民の前から離れなかった。」、このようにして神はこのイスラエルの民とともに旅をなさった訳です。

・律法が享受されたときも：モーセがシナイ山に上ると雲が山を覆ったと書かれています。出エジプト24：15-18「：15 モーセが山に登ると、雲が山をおおった。：16【主】の栄光はシナイ山の上にとどまり、雲は六日間、山をおおっていた。七日目に主は雲の中からモーセを呼ばれた。：17【主】の栄光は、イスラエル人の目には、山の頂で燃え上がる火のように見えた。：18 モーセは雲の中に入って行き、山に登った。そして、モーセは四十日四十夜、山にいた。」、出エジプト34：5「：5【主】は雲の中にあって降りて来られ、彼とともにそこに立って、【主】の名によって宣言された。」、山が雲で覆われたと、人々は神の臨在を知るのです。

・幕屋が主の指示どおりに完成したときも：幕屋が雲で満たされた様子が記されています。出エジプト40：34, 35「：34 そのとき、雲は会見の天幕をおおい、【主】の栄光が幕屋に満ちた。：35 モーセは会見の天幕に入ることができなかった。雲がその上にとどまり、【主】の栄光が幕屋に満ちていたからである。」。

明らかに、この「雲」というのは、こうして神の臨在を象徴するものです。

では、先ほどの質問に戻って、この「再臨」はどちらの再臨を指しているのか？です。私たちクリスチャンが待っている、空中で主と会う「空中再臨」なのか？それとも、クリスチャンとともに主が地上に戻って来られる「地上再臨」のことなのか？結論を言うと、これは「地上再臨」のことです。主イエス・キリストがクリスチャンとともにこの地上に帰って来る、そのことです。

1) 再臨の特徴

これが「地上再臨」であることの二つの理由

(1) 雲に乗って来られる 7a節

「見よ、彼が、雲に乗って来られる。」、これは「地上再臨」に関する預言の成就です。実は、このことに関して預言がされています。

・ダニエルの預言：旧約聖書のダニエル書7：13に「私がまた、夜の幻を見てみると、見よ、人の子のような方が天の雲に乗って来られ、年を経た方のもとに進み、その前に導かれた。」、「人の子のような方」

すなわち、キリストが天の雲に乗って来られるというその様子がここに記されています。

・主イエスが「世の終わり」に関して弟子たちに教えられた：新約聖書にも、マタイ24：30にこのように書かれています。「そのとき、人の子のしるしが天に現れます。すると、地上のあらゆる種族は、悲しみながら、人の子が大能と輝かしい栄光を帯びて天の雲に乗って来るのを見るのです。」と。非常によく似たことが記されています。

この「天の雲に乗って来る」というのは、実は、旧約聖書の中から預言されていたことです。キリストはそのようにして来られるということです。

その後どうなるか？そのことも聖書は教えています。ゼカリヤ書14：4、5「4 その日、主の足は、エルサレムの東に面するオリーブ山の上に立つ。オリーブ山は、その真ん中で二つに裂け、東西に延びる非常に大きな谷ができる。山の半分は北へ移り、他の半分は南へ移る。5 山々の谷がアツアルにまで達するので、あなたがたは、わたしの山々の谷に逃げよう。ユダの王ウジヤの時、地震を避けて逃げたように、あなたがたは逃げよう。私の神、【主】が来られる。すべての聖徒たちも主とともに来る。」、ダニエル7：14「この方に、主権と栄光と国が与えられ、諸民、諸国、諸言語の者たちがことごとく、彼に仕えることになった。その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがない。」、キリストが雲に乗って帰って来た時に、その後、主はオリーブ山に来られるのです。そして、オリーブ山が二つに裂けるとあります。雲に乗って来た後、この救世主、救い主は地上に降りて来られるのです。しかも、降りて来る場所がオリーブ山であると約束されています。

だから、私たちはここに記されている再臨が空中再臨でなくて地上再臨のことであると言えるのです。なぜなら、空中再臨ではイエスは地上に降りて来られないからです。Ⅰテサロニケ4：16－17「16 主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、17 次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。」。ですから、この再臨は主イエス・キリストは確かに雲に乗って戻って来られるが、地上に帰って来られるのではなくて、ご自分のもとにクリスチャンたちを招くと書かれています。ですから、空中でクリスチャンたちが主にお会いするという、これが「空中再臨」です。イエスは地上に帰って来るのではなくて、空中に帰って来られ、そこにクリスチャンたちを迎えてくださるのです。

このようにこの黙示録1：7で言われている出来事は、確かに、旧約聖書の預言でもありましたが、同時に、使徒の働き1：11を思い出してください。主イエス・キリストが天に凱旋なさったとき、弟子たちはその様子を見ていました。すると白い衣を着た人が二人彼らの側に立ってこう言いました「ガリラヤの人たち。なぜ天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たときと同じ有様で、またおいでになります。」と、まさに、これが成就です。ですから、これが「地上再臨」だと言える一つ目の理由は、主はこの地上に帰って来られるという預言の約束を見たときに、それが成就したことを知るので。

（2）再臨を目撃する 7b節

7節の続きに「すべての目、ことに彼を突き刺した者たちが、彼を見る。地上の諸族はみな、彼のゆえに嘆く。」と書かれています。この再臨は人々が実際に自分たちの目で見ると言っています。彼らは救世主が雲に乗って帰って来られる様子を実際に見ると言うのです。空中再臨の場合は一瞬のうちにその出来事が起こります。Ⅰコリント15：52に「終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。」と書かれている通りです。ここには「一瞬」ということばが出ています。また、「ラッパが鳴る」というのは、今のこの時代、教会の時代が終わることを告げるその知らせです。

様々な形でいろんな報告がされます。先日もイギリスで王室に女の子が生まれたとき、建物の前でベルを鳴らしながらその報告をする人の様子がニュースで流れていました。同じように、今の時代、教会の時代、恵みの時代と言われているこの時代が終わる時に、「終わりのラッパとともに」と、ラッパが鳴ると書かれています。この時代の終わりを告げる知らせのことです。その後に「一瞬のうちにです。」とあります。「一瞬」の「瞬」は「まばたき」です。ですから、まばたきをした瞬間、その瞬間にもうその人たちはキリストのもとに引き上げられているのです。あっという間の出来事だと言うのです。

だから、多くの人たちはどこに行ったのか分からないはずですが。一瞬のうちに、クリスチャンたちがいなくなってしまうのですから。どこに行くのか？キリストのもとに、空中でイエスにお会いするのです。「死者は朽ちないものによみがえり、」、すでに亡くなっているクリスチャンのことです。そして、「私たちは変えられるのです。」、生き残っているクリスチャンたちが一瞬のうちに栄光のからだに変えられて挙げられ、空中で主とお会いするのです。まさに、Ⅰテサロニケ4：16、17で教えられてい

るのと同じことがこのⅠコリント15章でも記されているのです。

ですから、空中携挙、空中再臨は一瞬のうちに起こるのです。もしかすると、こんなことはあってもいいかもしれませんが、夫婦がともに生活をしている中で、いっしょに食事をしているときにその瞬間が訪れたならクリスチャンだけがいなくなってしまう、一瞬のうちに…。それが空中再臨に関して聖書が教えることです。まばたきのうちに、生きているなら、その人は栄光のからだに変えられてキリストのもとに挙げられ、そして、すでに死んでいるなら、その人も同じように栄光のからだに変えられて主にお会いするということです。

しかし、今見ている黙示録の1:7では「人々を見る」のです。救世主が来られるその出来事を彼らは実際に目撃するのです。だれが見るのか？「すべての目、ことに彼を突き刺した者たちが、」と書かれています。もう一つのグループがあります。「地上の諸族はみな、」と書かれています。二つのグループが存在しています。

・「彼を突き刺した者たち」：実は、このことも旧約聖書の中に書かれています。ゼカリヤ書12:10「わたしは、ダビデの家とエルサレムの住民の上に、恵みと哀願の霊を注ぐ。彼らは、自分たちが突き刺した者、わたしを仰ぎ見、ひとり子を失って嘆くように、その者のために嘆き、初子を失って激しく泣くように、その者のために激しく泣く。」と出て来ました。「自分たちが突き刺した者」を見るのです。そして、ここではこの人たちがだれなのかを悟るためのヒントが出て来ます。「ダビデの家とエルサレムの住民の上に」とあります。これはユダヤ人たちです。

*** 「彼を突き刺した者たち」とは、ユダヤ人、特に、まだ救いを受け入れていない、イエス・キリストを信じていない未信のユダヤ人たちのこと**

続けて見てください。「わたしを仰ぎ見、ひとり子を失って嘆くように、その者のために嘆き、初子を失って激しく泣くように、その者のために激しく泣く。」とあります。つまり、この未信のユダヤ人たちは来られるイエスを見て、来られるキリストを見て嘆いて激しく泣くとゼカリヤは記しているのです。

黙示録1:7に戻って、「すべての目、ことに彼を突き刺した者たちが、彼を見る。」と書かれています。この「見る」ということばは、ギリシャ語の辞典の解説を見ると、「彼らは赦しと救いを求めて彼を見る」と、その意味でこのことばが使われていると解説されています。彼らは来られた救世主を見て「涙を流す、嘆いて泣く」と書かれていましたが、なぜ、彼らはそのように涙を流したのか？彼らは自らの罪に気づき、そして、神の前に赦しと救いを求めるからです。実は、先ほど見たゼカリヤ12:10には「わたしは、ダビデの家とエルサレムの住民の上に、恵みと哀願の霊を注ぐ。」とありました。神が約束されたのは、この人々の上にあわれみを示すということです。同じゼカリヤ書13:1には「その日、ダビデの家とエルサレムの住民のために、罪と汚れをきよめる一つの泉が開かれる。」とあります。つまり、救世主が帰って来られる時、キリストが戻って来られる時に、それまで信じていなかったユダヤ人たちがこの救いに与るということです。

黙示録を見ていくと、確かに、多くのユダヤ人たちの救いのことが記されています。空中再臨が起こった後、主イエス・キリストを信じた人たちがすべて、地上からイエス・キリストのもとに引き挙げられてしまった後、地上の世の中は大変な患難時代が7年間続きます。もちろん、その間も、異邦人も、そして、特に、このユダヤ人たちも信仰に与ります。イエス・キリストを信じるのです。そして、イエス・キリストが帰って来られるときにも、このみことばの約束によれば、多くのユダヤ人たちが信仰に与るのです。

・「地上の諸族はみな」：これは救われていない未信の異邦人のことです。彼らの場合は「地上の諸族はみな、彼のゆえに嘆く。」とあります。「嘆く」とは、皆さんもよく見かけられると思いますが、悲しみにある時にこの地域の人は胸を打ちながら悲しみを表現します。そういうことばです。大変な悲しみを表わすのです。

*** この救い主を拒んだ者たちは、拒み続ける**

しかし、このみことばを見ると、彼らはそのようにして主の前に自らの罪を悔い改めて救いに与るのか？そのことは記されていません。彼らは主イエス・キリストが帰って来られるその様子を目の当たりにしても、それでもなお、多くの人たちはこの救いを受け入れようとはしないということです。悲しいことです。先のユダヤ人たちに対しては神はそのように救いに与ると約束をされていましたが、異邦人に対しては、彼らは主イエス・キリストが戻って来られても、なお、この方に逆らい続けると言います。

思い出しませんか？あの「ラザロと金持ち」の話の中で、炎の中の苦しみの中にいる金持ちが言います。ルカの福音書16:27-31「:27 彼は言った。『父よ。ではお願いします。ラザロを私の父の家に送っ

てください。：28 私には兄弟が五人ありますが、彼らまでこんな苦しみのある場所に来ることのないように、よく言い聞かせてください。』：29 しかしアブラハムは言った。『彼らには、モーセと預言者がいます。その言うことを聞くべきです。』：30 彼は言った。『いいえ、父アブラハム。もし、だれかが死んだ者の中から彼らのところに行ってやったら、彼らは悔い改めるに違いありません。』：31 アブラハムは彼に言った。『もしモーセと預言者との教えに耳を傾けないのなら、たといだれかが死人の中から生き返っても、彼らは聞き入れはしない。』

結局、信じたくない人は信じないのです。どんな奇蹟を見ようと信じたくない人は信じないのです。人間の罪というのは「神よりも自分を選択する」ことです。多くの人たちはイエスの十字架のことを聞いて理解した上でそれを拒むのです。どれ程多くの人たちがこの救いを拒んで来ているでしょう？救われた私たちは「どうしてこの救いが分からないのか…？」と思います。彼らはその話を聞いても、彼らは神よりも神以外のものを選択するのです。そこには永遠の滅びがあると聞いても、それでも彼らはそれ以外のものを選択するのです。主イエス・キリストが戻って来た時に、多くの未信者たちはイエス・キリストが帰って来られるのを見ます。でも、そのことを嘆いても彼らは悔い改めて救い主を受け入れようと言わないと言うのです。まさに、今起こっていることが後にも起こること、そのことをヨハネは私たちに教えてくれるのです。

預言を見る時に、ここに記されていることはイエスが地上に帰って来ることであり、そして、イエスが帰って来る時にはみなが見ると言います。これは明らかに空中再臨の出来事とは違う、ゆえに、ここで言われていることは地上再臨のことであると結論づけるのです。

2) 再臨への備え

再臨のことを話したヨハネ、彼自身はこの再臨に対して備えが出来ていたことをこの7節の後半で教えてください。「しかり。アーメン。」と記されています。

- ・「しかり」：これは強い肯定、断定を表わすことばです。これはギリシャ語です。
- ・「アーメン」：「まことに、その通り」という意味です。これはヘブル語です。

ここでヨハネは、ギリシャ語とヘブル語を使ってこのように記したのです。「しかり。アーメン。」と。

* どうして、ヨハネはこのように言ったのか？

なぜ、そのような使い方をしたのか？ウイリアム・バークレーはこのように言っています。「ギリシャ語とヘブル語による表現を用いることで、ヨハネはその恐ろしい厳粛さを強調した。」と。ヨハネは神が約束されたことをよく知っていました。主イエス・キリストとともにいました。主イエス・キリストは戻って来るということを聞きました。そして、その出来事を彼が考える時に、その厳粛さゆえに、しかも、そこに恐ろしさがあった。それゆえに、「しかり。アーメン。」と言ったのです。

つまり、彼はその出来事が何時起こってもいいように備えをしていたということです。それが何時起こるか分からないけれど、確実に起こることを知っていたから「その通りだ！」と言うのです。「必ず、そうなる！」という強い肯定であり、断定なのです。ですから、このことばをもって、彼は主の再臨に対して強い確信を持っていたということを表わすのです。そして、ヨハネは再臨を覚える時に、恐れとともにその出来事の厳粛さに対して特別な思いを抱いていたのです。主が帰って来られる、この神が再び帰って来られると。

7節の最初のところに目を留めてください。「見よ、彼が、雲に乗って来られる。」と、この「来られる」という動詞をヨハネは現在形を使っています。つまり、まさにもうその途上にある出来事と彼は思っていたということです。ヨハネは主の再臨がまだかなり先のことだとは思っていません。それなら、このような表現はしません。現在形を使うことによって、今もうその途中である、主が今まさに雲に乗ってこの瞬間にも現われるような、そのような思いを現わしたのです。

ですから、この7節でヨハネが教えることは、主はもうその途上にある、今その途中だ、そして、その出来事は確実に起こることです。だから、ヨハネはこの瞬間に主にお会いする備えをしていたはずで、彼はそれが確実に起こる出来事であり、今まさに起こらんとしていると、そのことをこのように告白しているからです。ヨハネが主の再臨を待望していた様子、そして、主の再臨の備えをしていたことがここに記されているのです。

このような思いを持って生きていた信仰者はヨハネだけではなく、あのパウロもそうでした。Ⅰコリント16：22に「主を愛さない者はだれでも、のろわれよ。主よ、来てください。」と書かれています。主の再臨を待ち焦がれていたことをこのように表現しています。ですから、パウロ自身も主にお会いする備えをもって歩んでいたのです。ヨハネもそうでした。他の信仰の勇者たちもみな同じです。

☆ 私たちクリスチャンはそうでありたい

そうすると、私たちが考えなければいけないことは「私はどうか？」ということです。この瞬間にイ

エスが帰って来られるかもしれない、主にお会いするその備えがあなたにはできているかどうかです。では、備えができているかどうかをどのように判断するのでしょうか？漠然としているので分かりにくいです。どのようにして生きることが備えのできた生き方なのか？感謝なことに、聖書は私たちがどのように生きることかを教えているので、短い時間ですが、いっしょに見ていきましょう。

◎備えを為すこと

I テサロニケ 5 : 5 - 11 をご覧ください。主イエス・キリストの空中再臨のことを4章の後半で話したパウロは、5章では、一人ひとりが「備えを為すこと」を教えています。「:5 あなたがたはみな、光の子ども、昼の子どもだからです。私たちは、夜や暗やみの者ではありません。:6 ですから、ほかの人々のように眠っていないで、目をさまして、慎み深くしていきましょう。:7 眠る者は夜眠り、酔う者は夜酔うからです。:8 しかし、私たちは昼の者なので、信仰と愛を胸当てとして着け、救いの望みをかぶととしてかぶって、慎み深くしていきましょう。:9 神は、私たちが御怒りに会うようにお定めになったのではなく、主イエス・キリストにあって救いを得るようにお定めになったからです。:10 主が私たちのために死んでくださったのは、私たちが、目ざめていても、眠っていても、主とともに生きるためです。:11 ですから、あなたがたは、今しているとおりに、互いに励まし合い、互いに徳を高め合いなさい。」

・救われた者の特色 : 5 節

5 節に「光の子ども、昼の子ども」とあります。神によって罪赦された者は「光の子ども」とであると言います。ですから、私たちは罪の中を、つまり、やみの中を歩みませんと言います。そのようにクリスチャンは生まれ変わったのです。イエス・キリストの救いに与った私たちは「光の子ども」、神の子どもなのです。罪から解放された者たちです。罪の奴隷であった私たちがそこから買い取られた、救い出されたのです。そのことを明らかにした後、

・救われた者の生き方 : 6 - 11 節

ここには、どのように生きていくべきかを教えています。パウロは「目を覚ましていなさい」と言います。「眠っていないで、目をさまして、」と。

(1) 目をさました生き方 6 節

* 「目を覚まして」 : 「油断なく注意する」ということです。イエスが帰って来るのはまだまだ先のことと思っていないのです。油断していないのです。今かもしれないという、そのような注意を払いながらということなのです。

* 「慎み深くしていきましょう」 6, 8 節 : 「慎み深く」とは「飲酒を慎む、真面目である」という意味を持ったことばで、新約聖書の中に6回記されています。自分の歩みをしっかりと吟味するということです。主にお会いするのに本当に相応しい者として今歩んでいるのか、生きているのか？ですから、最初にパウロは、あなたは注意深く時間も機会も無駄にしないようにと言うのです。パウロのことばを見ましょう。テトス 2 : 11 - 13 「:11 というのは、すべての人を救う神の恵みが現れ、:12 私たちに、不敬虔とこの世の欲とを捨て、この時代にあつて、慎み深く、正しく、敬虔に生活し、:13 祝福された望み、すなわち、大いなる神であり私たちの救い主であるキリスト・イエスの栄光ある現れを待ち望むようにと教えさせたからです。」、I テモテ 6 : 14 「私たちの主イエス・キリストの現れの時まで、あなたは命令を守り、傷のない、非難されるところのない者でありなさい。」

(2) 神の真理を信頼して生きる 8 - 9 節

「信仰と愛を胸当てとして着け、救いの望みをかぶととしてかぶって、」と、主にお会いする備えが出来ている人たちは、神の真理にしっかり立ち、その真理に信頼を置いて生きる人たちです。自分勝手な解釈や考えではなく、神が言われている真理にしっかり立ちその真理に信頼を置いて生きるということです。

(3) 主とともに生きる 10 節

主に会う備えができている人たちは、主とともに生きているのです。今も、そして、永久にです。私たちは確かに、イエスにお会いして、その後、永久にイエスとともに住むと言います。でも、今イエスはどこにいますか？あなたのうちにいてくださるのでしょうか？三位一体の神があなたのうちにいてくださる。もう、イエスとともに生きる生き方は始まったのです。将来を待っているのではありません。今もうすでにその生き方が始まっているのです。ですから、あなたの国籍は天にあるのです。あなたは光の子どもなのです。生まれ変わったのです。神の所有物なのです。ですから、主に会う備えが出来ている人たちは、この瞬間を主とともに生きているのです。主の臨在を覚えながら、主に喜ばれることを考えながら歩んでいる人たちです。

(4) 徳を高め合う 11 節

「徳を高め合っていきなさい」と言います。信仰者として主に会う備えができている人たちは、周りの兄弟姉妹たちの信仰が成長することを考えながらすべてのことをするのです。私の成長のためではな

いのです。あなたの信仰が成長するには、あなたがだれかのために仕えていくことです。人々から仕えられているうちは残念ながらあなたの信仰は成長しないのです、もちろん、基礎的なことを教えてもらうことは必要です。でも、あなたの信仰が成長していくのは、実際に、だれかの成長のためにあなたが何かを始めることです。私たちは何のためにすべてのことをしているのか？それは主から命じられたように「弟子を作ること」です。伝道して、その人が救われて、その人たちが成長するように。成長した人たちはまた同じように、弟子を作るという働きをするのです。

私たちはキリストの福音を伝えることが必要です。救いに与った人たちの成長のために働いていくことです。ですから、徳を高め合っていくということは、私たちが自分のことを見ないで、人々の成長のために尽くしていくことです。教会の中でお休みの方や弱っている方がいるかもしれません。教会に来られた新しい方がいるかもしれません。その人たちのために祈り、何ができるのかを考えて、彼らのために尽くしていこうとする、そのようにみことばは教えてくれるのです。そのような生き方こそが昼の子どもとしての生き方であり、光の子どもとしての生き方であり、まさに、そういう生き方を継続する人、それが主にお会いする備えが出来ている人たちだと言うのです。

ですから、聖書はこのように教えてくれていますから、それを聞いている私たちは実践することです。このように生きていくことです。見て来たように、しっかりと目を覚ますことが必要です。先延ばししないことです。「また今度…」ではなく、今日が最後かもしれないと思って、しっかりと主の前にやらなければいけないことをするのです。その機会を逸することなく、どんな時でも神のことばに信頼を置くことです。その真理にしっかりと立つことです。主とともに歩み続けていくことです。そのことをしっかり自覚して生きることです。主が私とともにいる、皆さんがしていることはすべて主とともにしてくださっています。テレビを見ているときも、ラジオを聞いている時も、インターネットを見ているときもそうです。あなたの側に主がおられるのです。そのことを意識してすべてのことをすることです。そして、人々の信仰の徳のために、成長のために尽くしていきなさいと、それが主に会う備えのできた人の生き方であると言うのです。

3) 神による保証 8節

「神である主、今いまし、昔いまし、後に来られる方、万物の支配者がこう言われる。「わたしはアルファであり、オメガである。」と、ヨハネは最後にこのことを教えます。というのは、思い出してください。なぜこの手紙が、このみことばが記されているのか？多くの迫害に遭っていたクリスチャンたち、この七つの教会の兄弟たちが励まされるためです。そこで最後に、このようなすばらしい祝福を神が与えてくださった、その方がもう帰って来られると、そのことを話した後、最後に、ヨハネはここで話して来たことの保証について、確実性について話をするのです。「神である主のその説明」がされています。

* 「神である主」についての説明

・万物の支配者である：このことばは「すべての権利を持っている方」ということです。英語ではこのことばをオールマイティ=almighty=と訳しています。すべてのことができる全能者という意味です。新約聖書にはこのことばが10回出て来ますが、黙示録にはその9回が記されています。ですから、ヨハネは、この約束というのは全能者なる神によって与えられたものであると言うのです。

・アルファであり、オメガである：このことばは皆さんもよくご存じです。ギリシャ語のアルファベットの最初と最後の文字です。アルファが最初でありオメガが最後です。

— 永遠性 = これは実は4節にも出て来ましたが、「今いまし、昔いまし、後に来られる方、」、つまり、時間を超越した永遠に存在されている方であるということです。初めもないし終わりもない、こんな神が私たちにこの約束をくださったということです。

— 全知 = もう一つは「全知」です。すべてのことを知っておられるということです。

この神はどんなことでもできる全能の方、オールマイティだけではなく、この方は永遠に存在されている方であり、そして、すべてのことを知っている方、その方の約束だと言うのです。

8節で「神である主」と見ましたが、この神はヘブライ語の「エル、エロヒム」、つまり、「全能のお方」ということです。「主」とはヘブライ語で「アドナイ」です。絶対的な権威者であると。そのことをヨハネはこの後説明してくれたのです。どんなことでもできる全能者であり、永遠に存在されている方であり、すべてのことを知っておられる全知のお方、この方の約束によると言うのです。

だから、様々な迫害を経験しているけれど、辛い目に遭っているけれど、恐れてはいけないと言います。9節を見てください。「私ヨハネは、あなたがたの兄弟であり、あなたがたとともにイエスにある苦難と御国と忍耐とにあずかっている者であって、神のことばとイエスのあかしとのゆえに、パトモスという島にいた。」とあります。ヨハネ自身が信仰ゆえに迫害を受けているということを言っているのです。大変

な迫害が広がっていて、多くのクリスチャンたちが信仰ゆえに迫害を受けていたのです。そこで神は、ヨハネを用いてこのメッセージを与えるのです。どんなにローマが強かろうと恐れはいけないと…。この時、もうすでにパウロもペテロも、多くの人たちが殉教していました。多くのクリスチャンたちがそのいのちを落としていました。ローマではクリスチャンにたいまつが付けられて生きたまま火あぶりにされて、多くのクリスチャンたちが殉教していました。そのような中であってヨハネは言うのです。「恐れはいけない！この約束をくださったのは神だ。そして、その神が間もなく帰って来られるから。あなたたちを迎えるために。」と。

イザヤ書にこのように書かれています。41：9－13「：9 わたしは、あなたを地の果てから連れ出し、地のはるかな所からあなたを呼び出して言った。「あなたは、わたしのしもべ。わたしはあなたを選んで、捨てなかった。」：10 恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。：11 見よ。あなたに向かっていきりたつ者はみな、恥を見、はずかしめを受け、あなたと争う者たちは、無いものようになって滅びる。：12 あなたと言ひ争いをする者を捜しても、あなたは見つけることはできず、あなたと戦う者たちは、全くなくなってしまふ。：13 あなたの神、【主】であるわたしが、あなたの右の手を強く握り、「恐れるな。わたしがあなたを助ける」と言っているのだから。」。神がどんな方であるかを覚えなさい、そして、その神の約束に立ちなさいと、この迫害下にあったクリスチャンたちにヨハネはこのような励ましを与えました。彼自身も迫害されていた。しかし、主の約束に立つのです。主がどのような方であるかを覚えるのです。このお方は全能であり、永遠に存在される方であり、すべてをご存じのお方であると。

皆さんも今いろいろなことを経験なさっているかもしれません。様々な敵と戦っているかもしれません。確かに、私たちには彼らが経験していたような迫害はないでしょう、でも、心から希望を奪っていくものはたくさんあります。心を動揺させるものもいっぱいあります。もし、皆さんがその戦いの中で勇気を失ってしまったり希望を見失ってしまっているなら、「神は変わっていない」ことを覚えるべきです。環境は変わっても、どの時代にあっても神が私たち信仰者に教えることは同じなのです。「わたしを信じていなさい。わたしの約束は必ず成る。」です。だから、その方を信頼して従い続けていきたいですね。なぜなら、もう間もなく主は私たちを迎えに来てくださるからです。あなたはその確信を持って今日生きていますか？主にお会いする備えをもって今日生きていますか？

力強く生きることです、信仰者の皆さん！私たちの周りにはこの救いを知らない人たちが溢れています。私たちが彼らに伝えなければいけないメッセージがあるのです。そのメッセージをしっかりと携えて出て行くことです。「主よ、私を使ってください。このすばらしい救いを一人でも多くの人たちに伝えるために私を使ってください。」と。恐れることなく怯むことなく、その約束を信じて「主よ、私を使ってください」という願いをもって、この一週間、証し人として出て行きましょう！

あなたがどんなことに直面していても、その問題からの解決方法はただ一つです。主に信頼を置くことです。それ以外の方法では解決方法はありません。だから、ヨハネはこのような励ましをもって、この迫害下のクリスチャンたちを励ますのです。その励ましはもしかすると今日のあなたに必要なかもしれません。主を見上げて信頼して従うことです。

《考えましょう》

1. 7節の「雲に乗って来られる」とは、何の出来事かを説明してください。
2. 主が雲に乗って来られた時に起こることを挙げてください。（7節）
3. 「わたしはアルファであり、オメガである。」の意味を教えてください。
4. 「主にお会いする備えが出来た生き方」とは、どのようにして日々を過ごすことかを挙げてください。